越谷市文化連盟
平成１１年度

『こしがや文化芸術祭』
平成１２年３月５日（日）

越谷市郷土研究会　展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　大ホールホワイエ

一．古代の集落址発見も期待される
市内・元荒川北部流域の古代遺跡　宮川　進

二．古利根川の「ばば渡し」　加藤幸一

三．増林の草創期とその後の歴史　山本泰秀

古代の集落址発見も期待される

一　市内・元荒川北部流域の古代遺跡

宮川　進

現在、区画整理事業が進行中の大袋西地区、この地域の中には埋蔵文化財包蔵地が含まれています。

埋蔵文化財包蔵地とは埋蔵文化財（土器・石器など）が地下に含まれているであろう、つまり、遺跡があるだろうことが表面採集などで推定できる土地のことです。

表面採集では、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器、須恵器が発見されています。区画整理事業にともなう事前調査により、市内大成町の見田方遺跡につぐ第二の遺跡の発見が期待されます。聖徳太子、天武天皇、紫式部の時代に、この越谷にはどのような人達が、どのような生活をしていたのか、それが解明される日が楽しみです。

	遺跡所在地	発見遺物	時代
①	越谷市野島二七八付近	土師器、須恵器	奈良・平安
②	越谷市小曽川二三五付近	土師器	古墳時代後期
③	越谷市大道上手八五付近	土師器、須恵器	奈良・平安
④	越谷市大道上手一八七付近	土師器、須恵器	奈良・平安
⑤	越谷市大竹西浦	土師器、須恵器	古墳・奈良・平安

土師器（はじき）…弥生式土器の系統を受け継ぎ、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけて使われた素焼きの土器。全体に赤みをおびている。

須恵器（すえき）…古墳時代以後の奈良・平安時代を通じて作られた。朝鮮半島に源流が求められる。ろくろも使用。還元炎焼成のため青灰色である。

三野宮
大道
中田
①
②
③
④
⑤

二　古利根川の「ばば渡し」

加藤　幸一

「ばば渡し」は増林村と対岸の上赤岩村を結ぶ古利根川にかかる渡しであった。林泉寺と勝林寺の中間から勝林寺よりにあった。「ばば渡し場」の「ばば」は、耳で聞くと「婆」を連想してしまう。そのためか、単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。「ばば渡し場」の「ばば」の由来は不明である。婆さんが渡し場にいたからとの言い伝えもあるが、もともとは「馬場」という意味だったのかもしれない。

勝林寺の第二十四世雪秀（故人）の妻である山本千代氏によると、昔（大正の頃）は、渡しの料金は往復で大人三銭、子供一銭で、自転車は十銭であったという。地元の中組の人たちは、年に二回、秋に米（玄米）三升、夏に麦（殻麦）六升を納めたので渡り賃なしで渡れたという。

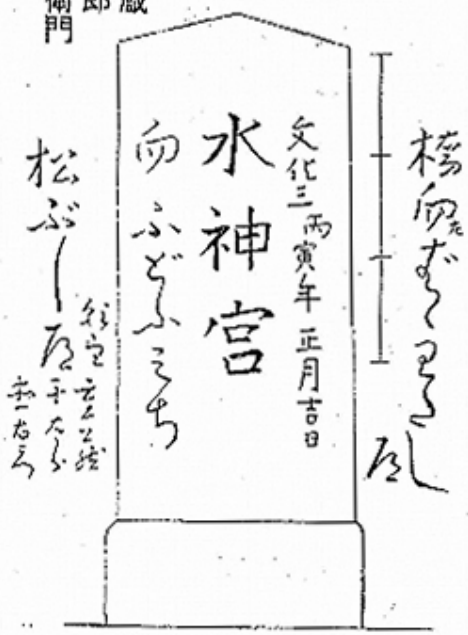
千代田橋（旧称、二子曽根橋）そばに道標（道しるべ）が刻まれた石塔がある。その石塔に関するデーターとその図版を紹介する。

名　　称　道標付き水神宮文字塔
所 在 地　増林・千代田橋そば山崎家（五二九八番）東の土手下
石塔型式　駒型（南東向き・高さは低）
年　　号　文化三年（一八〇六）

［左側面］
橋向左ばゝわたし　道

［正面］
文化三丙寅年正月吉日
水神宮
向ふどふミち

［右側面］
願主　重蔵
松ぶし道　千太郎
直右衛門



ばば渡し道、不動道、松伏道の文字が刻まれている道しるべを兼ねた石塔である。栗原家（増林五三〇三番）が管理している。もとは、新方川が拡張される以前の千代田橋（旧名、二子曽根橋）の南東側旧土手の上にあった。

『橋向左ばゝわたし（橋向こう左、ばば渡し）』とは、橋（二子曽根橋）の向こうの道が古利根川にある「ばば渡し場」に通じる道であることを示している。橋を渡るとすぐに分かれ道（今はない）になっているが、向かって左の道（今はない）を多少蛇行しながら真北に進んで行く。するとかつての古道に突き当たる。それを左に曲がる。すると間もなく現在の新道（平方東京線）と合流する。さらに六十メートル先に進み、右に曲がり古利根川に通じる道を進む。突き当たりの土手が渡し場跡で、向かって左側あたりが渡し守りの人（須賀家、屋号は「渡し場」）がかつて住んでいた所である。渡しは、戦後のカスリン台風が関東を襲った昭和二十二年（一九四七）頃まで行われていた。川原には今でも二十本くらいの松の木が川に平行して密集して並んでいるが、これは当時の渡し場の名残である。

『向ふどふミち（向こう、不動道）』とは、橋を渡らずに南に向かう道が大相模の不動尊に通じる道を示している。今もその名残の道がある。この不動道を道なりにしばらく行くと、T字路となり、突き当たりは現在も稲荷宮を祭っている元荒川のそばに住む百木家である。ここから西に向かう道を進むと、元荒川にかかる「不動の渡し場」に行く。東に向かうと、森西川（もりにしかわ、増森村西川）や吉川に行くのである。

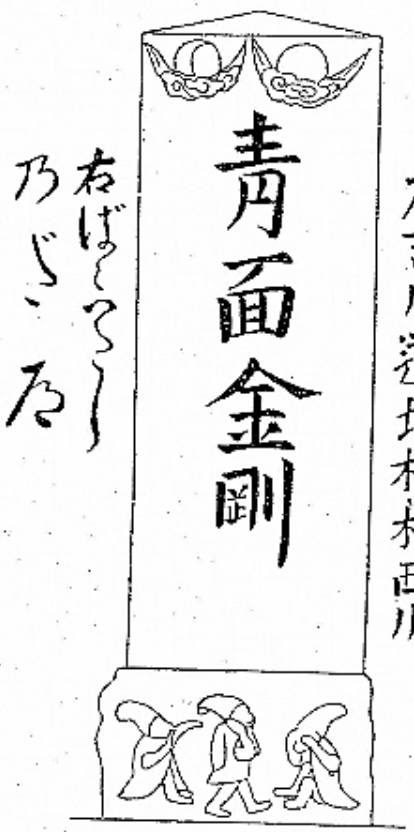
次に百木家の石塔のデーターと図版を紹介する。

名　　称　道標付き文字庚申塔
所 在 地　増林・百木家（増林五六四三番）敷地内・稲荷祠そば
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　　号　寛政十二年（一八〇〇）

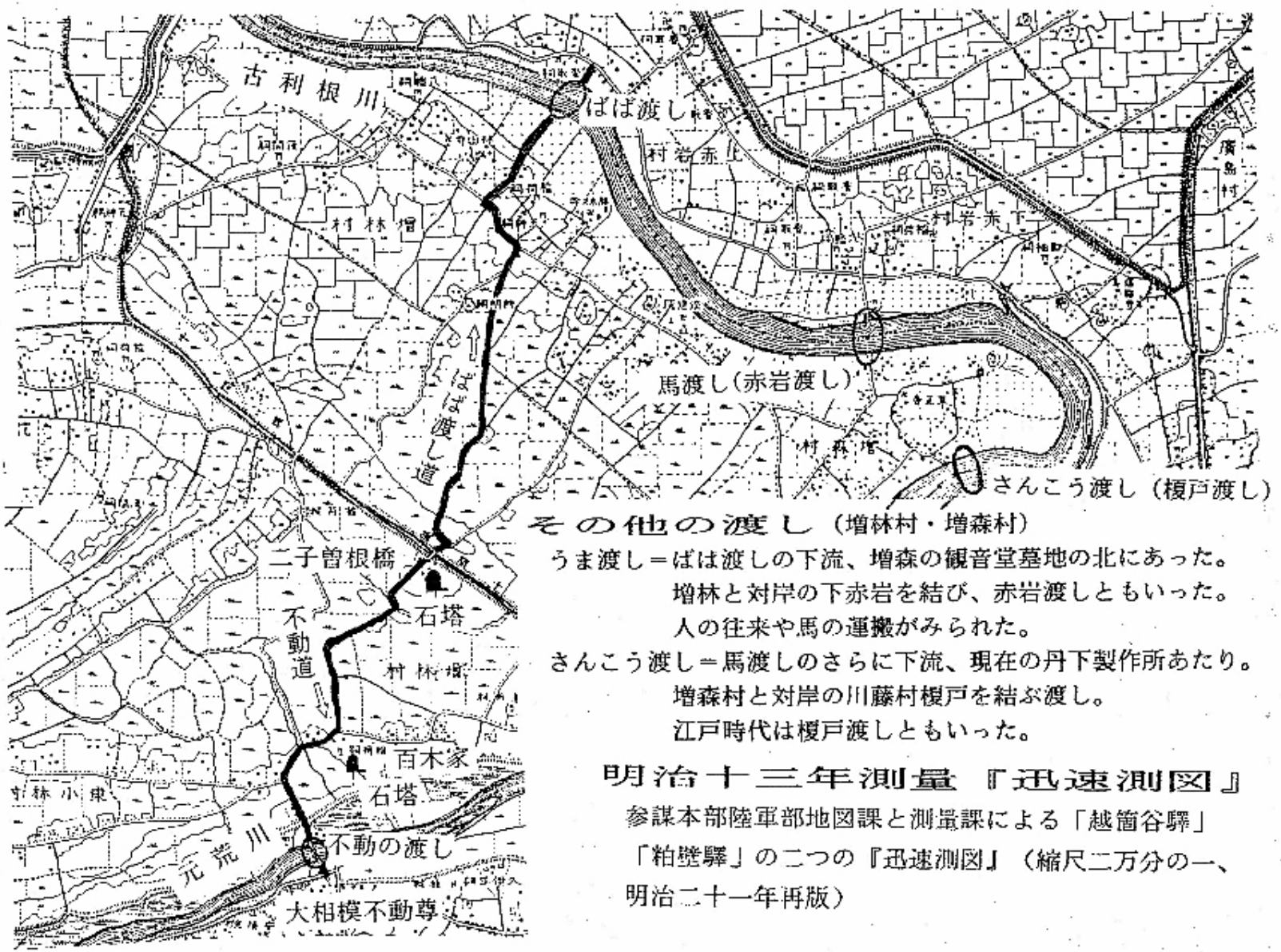
［左側面］
寛政十二庚申十一月吉日
左 吉 川 道 増 林 村 西 川

［正面］
（日月）青 面 金 剛　（三猿）

［右側面］
右ばゝハたし
のだ 道



吉川や古利根川に架かる「ばば渡し」などに行くための道しるべを兼ねた庚申塔である。この庚申塔は他の場所から現在地に移されてきたと思われる。移される前の本来の位置は、千代田橋（旧称、二子曽根橋）より南に向かう道を道なりに来ると百木家そばのT字路に突き当たり、このT字路の北東角あたりであったと推定できる。この庚申塔に刻まれた道標「左、吉川道・増林村西川」とは、この庚申塔を造立した場所が増林村西川で、T字路からこの庚申塔の左側に（向かって右に）、つまり東方面に進むと吉川に通じる。また「右、ばゝハたし（ばば渡し）」とは、この庚申塔の右側に（向かって左に）、つまり北方面に進むと、「ばば渡し」や野田に通じるのである。



その他の渡し（増林村・増森村）

うま渡し＝ばば渡しの下流、増森の観音堂墓地の北にあった。
増林と対岸の下赤岩を結び、赤岩渡しともいった。
人の往来や馬の運搬がみられた。

さんこう渡し＝馬渡しのさらに下流、現在の丹下製作所あたり。
増森村と対岸の川藤村榎戸を結ぶ渡し。
江戸時代は榎戸渡しともいった。

明治十三年測量『迅速測図』

参謀本部陸軍部地図課と測量課による「越箇谷驛」「粕壁驛」の二つの『迅速測図』（縮尺二万分の一、明治二十一年再版）

三　増林の草創期とその後の歴史

山本　泰秀

越谷市史から増林地域を見つめると、最も古い史実は、勝林寺由緒記によると平安中期の万寿二年（一〇二五）三月十日に源勝によって勝林寺の元となった寺院が開山するという事項である。

これ以前の増林の歴史は空白とされていた。このことに関し疑問を抱いた私は増林の歴史を探るべく平成八年から増林の中妻前で土器の表面採集を三年にわたって行ってきた。その採集した土器破片を埼玉県埋蔵文化財調査事業団資料部長の高橋一夫氏に見せたところ、弥生時代後期から古墳時代前期（三世紀後半から四世紀前半）の「弥生式土器」と「五領式土器」と鑑定された。その結果、増林の歴史の草創期は、平安中期より一気にこの頃にまで遡ることができ、市内にある古墳時代後期（六世紀後半）の見田方遺跡よりもさらに古いことがわかったのである。

なお弥生式土器は埼玉県東部低地では数例しか発見されておらず、五領式土器は埼玉県東部（埼葛地域）においては未発見のものである。

増林地域は、埼玉県東部に位置し、沖積平地と呼ばれ、平坦な地形を成している。東に古利根川、西に元荒川、北のあたりに逆川（鷲後用水）、中央を流れる千間堀（新方川）という具合にとても水量豊かな地帯である。古くは下総国増林と称され、江戸時代になると武蔵国増林となる。勝林寺蔵の寺院法度本末寺制度を見ると、慶安二年（一六四九）七月二日、武州埼玉郡菖蒲領三ケ村慈高山長竜寺由緒書に「長竜寺を本寺とし末寺を下総国勝林寺と為す」とする寺社御奉行所宛文書が現存する。よって武蔵国への編入年代は、慶安二年七月二日以降であることが確かであろう。

次に武蔵国増林の土地利用の歴史を少したどってみることにする。

《武蔵田園簿》（慶安年間）

増林の石高　一四〇二石九斗六升一合

内訳　田方　五六五石　九合

畑方　八三七石九斗五升二合

※北島正元校訂の冒頭解説の項に、武蔵田園簿の作成年代について、慶安二年から三年にかけてであるというのが林氏の見解云々とある。

《嘉永六年（一八五三）領村石高普請覚書》（増林上組の須賀徳雄氏所蔵）

増林の石高　　一八五四石四斗二合

田の面積は一〇二町三反七畝八歩、畑の面積は一〇八町八反二畝八歩

江戸時代を通して、盛んに新田開発がされ、新規に新田分として石高が追加されているのだが、嘉永年間に入っても畑地の方が田の面積よりも多かったことが分かる。真言宗福寿院（明治四年十一月廃寺）前から、北から南に向かって城ノ上橋近くまでの道を江戸時代に検見道と呼んでいたという。東側は田地、西側が畑地で両作付け状況を役人が検見したと考えられる。このたび、私が表面採集した地点がこの場所に当たる。明治十三年（一八八〇）の陸軍測量図を見ても自然堤防から延長され畑地が存する。地元年寄りの言い伝えによれば、昔は雑穀の生産地であったという。明治三十九年の陸軍測量図では、畑地がかなり減少してきている。

増林でも明治中頃に至って近代産業が芽生え、土を扱って製品化する瓦、煉瓦工場が相次いで誕生してきた。中島地区の榎本煉瓦工場、増森三丁野上田商会、飯田瓦工場。増森本田の中村煉瓦工場。出来上がった製品はそれぞれ舟運で各地に運ばれていったようである。

近隣松伏には、篠崎、島津という瓦工場もあり、遠方では草加の大阪窯業へと土が運ばれたという話は今でも耳にすることがある。

土を必要とする瓦、煉瓦工場の出現と、畑地の作物の収益性よりも田地の方の収益性の高さとが相乗して、地主が積極的に畑地から田地へと転換していったのである。戦後に至っては、水掛りの悪い田地の土を抜いて牛馬車で屋敷内に運んだり、土建業者が埋め立て用土として持ち去ったりと、さま変わりしてきた。さらに、地形の大きな変化の訪れは、昭和三十三年（一九五八）の土地改良事業である。用排水路、道路、屈曲した農地の整備事業で、概ね今日の形となってきたのである。

現在は田圃であっても以前は畑地であったことが理解できよう。つまり、江戸時代には畑地であったということは、江戸時代以前もこの一帯は湿地のような低い地帯ではなく、高台と呼ぶにふさわし地形をしていたことが推測されうるのである。古代の人々が生活しやすい場所として、川の近くで且つ高台という条件を満たしてくれると思われる地点で土器が出土したのである。古代人が生活していたとしても不合理なことはないのである。

郷土研究会に入会されませんか。

せひ、お仲間に！

あなたの余暇を、ちょっと高尚で、楽しくて、そして健康にもよい
『趣味タイム』に使ってみませんか。

越谷市郷土研究会とは（平成十二年二月現在）

◎史跡めぐり・研究発表会などのイベントを毎月実施しております。
その他に、古文書クラブの学習会も月に二回程実施しております。
また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に、展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和四十年（一九六五）三月に発足しました。
以後地道に活動し、現在は会員数が二百五十名程度になりました。研究発表会は百二十七回となり、史跡めぐりは二百七十四回を数えるまでになりました。
最近は、水戸方面や益子・笠間方面、さらに深谷方面のバス史跡めぐりも実施してきました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。
平成十年六月十四日（日）と九月十三日（日）
『越谷・建長板碑建立七五〇年　記念歴史講演会』（後援は越谷講演会・越谷文化協）
平成十一年八月二十二日（日）
『創立三十五周年記念講演会―越谷吾山―』（後援は越谷講演会・文化協・郷土研）
平成十二年一月三十日（日）
『創立三十五周年記念講演会―太田三楽斎資正一代記―』（後援は越谷講演会・文化協）

郷土研究会にお入りになりませんと

◎すべてのイベントの案内が受け取れます。
せっかくよい行事があったのに知らなかった、ということがありません。

◎会員だけのための特別行事にも参加できます。
会員に限り、例えばバス史跡めぐり等に参加できます。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間二、〇〇〇円（会報・諸案内状・諸会議費等）です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・年齢・電話番号を記入し、下記までお寄せ下さい。
または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0806　越谷市　宮本町　3－117－8　谷岡隆夫方
越谷市郷土研究会

◎電話でのお問い合わせは、☎0489-62-7527　谷岡隆夫（当会会長）まで。